

## 虫と子供

豊田 一秀

虫をいじめて子は育つ、と言ったら虫たちにおこられるだろうか。

浦島太郎の初めの部分に子供たちがカメをいじている所を太郎がとめる場面がある。もしも太郎が俺にもやらせろと子供と一緒にカメをいじめてしまったら、この話は全く成り立たなくなってしまう。

一般に社会において弱い者いじめは是認されていないから、「カメいじめ」をとめ

た太郎は普通の良い大人として描かれている。

一方、カメをいじめていた子供たちも特に問題のある「困った子供」として描かれているわけではない。ごくありふれた子供の遊びの一場面として表わされているのである。

思えばカメ程いじめがいのあるいきものもない。歩みのにぶさ、つつくとすぐに

手足や首をひっこめるくせに、すぐに何事もなかったかのようにまた歩き出すあのずうずうしさ、棒で打たれても、ただただ耐えているだけの無抵抗さ、さかさまにした時のあのぶざまな感じが。どれひとつとってもいじめるに価する。

カメに似ていじめがいのある虫にダンゴ虫がいる。呼び名も他にゾウリ虫、丸虫、玉虫、便所虫と様々で、この虫がいかに子供

の身近にいるかを思わせる。私自身のはつきり残っている記憶に、この虫と遊んでいた時のことがある。ボールのようになって身を守るあの保身方法がにくらしくて無理やり開かせたりしているうちに、ついにレスリングの逆エビ固めよろしく逆さまにまゐるめようとして、虫の中身が出て来てしまった時の「しまった!!」「いじめ過ぎた!!」という思いは今も手の感覚としてさえ残っている。

弱い者いじめばかり書いたが、バッタを紙ヒコーキや笹舟に乗せてすっかり自分がそれに乗ったような気持ちになったことや、アリの巣の出口にどつと気前よく砂糖をまいて、サンタクロースってこんなだろかなと思ったりしたこともある。

子供は虫を子分にし、かわいがりそしていじめる。

近年の都会では仲々そうもいかないが、虫は子供の身近な存在である。子供より大

きな虫はいないし、大体は子供の方が勝負して勝つ。しかしハチのようにピリッとしてっ返しをする輩もいる。虫は美しい。そしてそれを捕え自分のものにするには、採り方、生態等、かなりのこつ、知識、そして時には勇氣と忍耐が必要である。

忍耐といえ、附属幼稚園の庭にはお山と称して小さな原っぱがある。芝生もなければ花壇もない。そこにはイチョウの大木と古い遊具、他には雑草が伸びるままにはびこっているのみである。子供はそこで草をつみ、虫を採り、寝ころがって空を見る。秋のよく晴れた日、年長の子供が、一メートル程の竹棒を持ってじっと原っぱに立って微動だにしない。何をしているかたずねると、「シーッ!!」としかられてしまう。やがて一匹の赤トンボがその棒の先にとまった。棒がピクッと動くトンボはすぐに飛び立つが、ちゃんと戻って来てまたとまる。するとその子は棒をそろそろと手

元に降ろし、そっと手をのばし、パッとつかまえてしまう。そして私の方を見て分かったかという目を見ると、つかまえたトンボを肩からつるした空箱に入れて、また棒を空につき立てている。その読みの深さ、その忍耐、まるでアリを待つアリ地獄のようにその時彼自身も虫になっていたのかもしれない。

考えてみれば子供と虫はどこか似ている。陽が少し温かくなり、水がぬるむと、とたんに子供の水遊びが多くなり、アリも外に出て来る。それをみつけた子供にせがまれて砂糖を渡すと、アリにやりつつ、自分もベロツとなめたりしている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

